

# デグーの千夜一夜物語

## 第五夜 ヤンキーのエスノグラフィ



### 1 注目されるヤンキーたち

「店員の風」 作詞作曲 匿名希望

オマエらに言っとくことがある。  
オレらは最高のナカマだから。  
旅立つオマエにおめでとう  
最後のメッセージ。店員さんには優しくしろよ

コンビニでも 居酒屋でも ビデオ屋でも  
店員さんには優しくしろよ

店員さんはお前等のこと、  
嫌ってるわけじゃないんだぜ。ちょっとグラサンとか、  
入れ墨とか、日焼けが少し怖いだけ

「全てのサービス、お客様に、  
平等にしたいはずなんですけど…」  
お前等がすぐに怒るからそのせいで手元狂うから  
(中略)

店員さんは ホントは分かってる  
オマエら ホントは優しいヤツらなんだってこと  
だから

無茶を言うな  
勝手するな  
我侘言うな  
順番守れ  
帰れ

店員さんには優しくしろよ レゲトン  
お前らのイキザマってのは  
店員さんに威張ることなのか レゲトン

「マイルドヤンキー」や「ヤンキー経済」という言葉はご存知でしょうか。これらは「**地元から出たがらない若者**」を指し、独特の文化と消費行動を行うことから近年注目されはじめています。とはいえ、きっと私たちの多くは、そのずっと前から不思議な存在として気にかけていたのではないのでしょうか。**なぜすぐ暴力をふるうのか、なぜ非行に走るのか**と。実際、70年代から不良やツッパリに暴走族と、マスコミが彼らを取り上げるようになりました。

### 2 なぜ日本にだけ暴走族がいたのか

暴走族は70年代に盛んになりましたが、実は、日本だけでなく、世界中で現れました。しかしながら、その数が多いと言われたアメリカですら全米で数千人だけで、日本では4万人を超える人数が暴走族になっていたのです。

なぜ日本だけこんな異常な数になったのでしょうか。当時は、彼らは受験戦争から落ちこぼれた者たちで、その鬱屈した反抗精神の現れだったと言われていました。実際、大学への進学率が上がり、競走が激しくなったので、若者にとって勉強が苦痛となっていた背景があります。そこで落ちこぼれが生まれるようになりました。**世界的にも珍しい学歴競走社会が、尋常じゃない数の暴走族を生んだ**というのですね。

### 3 暴走族のエスノグラフィー

しかし本当に落ちこぼれが暴走族になったのでしょうか？社会学には「**エスノグラフィー**」という研究方法があります。「民俗誌」という意味で、**実際にその集団に入って調査してみる手法**です。そう、ある研究者が実際に暴走族に潜り込んで調べてみたのです。すると世間で言われていた落ちこぼれ説とは異なる実態が見えてきました。

言われてみれば当然なのですが、暴走族に入っている人たちは、そもそも**誰も自分のことを落ちこぼれだなんて思っちゃいなかった**のです。最初から受験戦争に参加する気がないもの、大学受験はするつもりだけど、楽しいからやるといふ人など、様々でした。

それでは何故暴走行為をするのでしょうか？それは凄く「**気持ちのいいこと**」だったからです。

現在ではスポーツ選手が集中すると、「**ゾーン**」という最大限自分の力が発揮できる状態になることが知られていますが、なんと、**暴走行為もゾーンに入る条件が揃っていた**ことがわかったのです。

音楽を爆音で流すことで聴覚を刺激してトランス状態に入りやすくし、危険なハンドル操作を行うことで自分の力の限界を試せて、なおかつ観客（マスコミ）もいる（誰でも「悪漢ヒーロー」になれる）。知らず知らずのうちに彼らはゾーンに入るための遊びを見つけ出していたというわけですね。

だからこそというべきか、本人たちも未成年の間だけの遊びだと割り切っており、20歳も超えて暴走行為をしている人は「ダメサイ」と嘲笑的になっていました。

### 4 ハマータウンの野郎ども



暴走族は、その面白さからヤンキー以外にも行く若者文化でしたが、イギリスのハマータウンの中学校で、ヤンキーそのものを調査してみた研究もあります。

その調査での疑問は、ヤンキーはそもそも、なぜ暴力的で、違反ばかり繰り返すのか？ということでした。これは今でも通じる疑問ですよ。

そこできちんと話を聞いてみると、彼らのあこがれる「**カッコいい男像**」が、彼らの父親が働く**肉体労働の現場で「使える男**」と見事にリンクしていたのです。

学校で使われる「礼儀正しい」言葉遣いは、ホワイトカラーの言葉遣いです。ところが、**危険やスピードが伴う肉体労働の現場では、すぐに伝わるのがなにより重要**です。「危ない！」「早くしろ！」、といった具合に短い言葉を使います。それが「良い子」には乱暴に見えるというわけですね。

そもそも暴走族のように、ヤンキーは学校での勉強も必要性を感じていません。だから真面目に授業を受けません。むしろ、ヤンキーの上司になるのは先生や「優等生」達のような人なので、彼らに反抗できる力を持つために、違反を繰り返すのが、彼らにとっての**必要な学び**であったというのです。

## 5 「ほんとうの男」を目指すヤンキー

これは教育学にとって衝撃的な結果でした。なぜならば、この結果は、教育とは何かということ突き付けてきたからです。

**ホワイトカラーだけが必要とする教育を、全員が従うべきものとする矛盾**がここには表れていました。ハマータウンのヤンキーたちも、ただただ非行を繰り返していたわけではなく、「ほんとうの男」を目指して喧嘩や反抗を繰り返していたので、彼らなりの生きる目標はあったのです。

また、彼らが大事にする「仲間」は、**就職先を紹介してくれるコネ**でもありました。父や知り合いが、勤めている会社を紹介してくれたのです。こうしてみると、彼らには学校など必要ないことが良く分かります。

## 6 さまようヤンキー

しかしながら、これらはあくまでも70年代の話です。ヤンキーの父親の仕事——大工や配管工や整備士——が豊富にあった時代の話です。90年代以降、工場は先進国から発展途上国へと移され、**父親の就いていたような仕事が無くなってきてしまいました**。

彼らの目指す「男らしさ」を追求しても、彼らが就職できる場所は居酒屋の店員やコールセンターなど、女性的な方が喜ばれるサービス業ばかりです。彼らの**アイデンティティと就職先が乖離**し始めてきました。

不思議なことに、2018年に発表された研究によると、父親が70年代の様な仕事に就いているヤンキーは、ヤンキー集団内でも偉い地位に就いている一方で、親がそういう職に就いていない者は地位も低く、学校を出た後も職を転々としているそうです。転々としてしまう理由は、家庭が貧しいためにじっくりと就職活動が出来ずにブラック企業に入ってしまうためなのですが、仲間内からは「あいつは信念がない」とバカにされ、ますます地位が低くなるのです。

## 7 ヤンキーは永遠に不滅

それでは、経済的背景を失った彼らのアイデンティティは今後変化していくのでしょうか？ある国の例では、どの職に就くかではなく、パートで稼いだ金での金ではしご酒をすることが「ほんとうの男」への道に繋がると、その在り方が変化したそうです。つまり、**消費でそのアイデンティティをつむごうとしている**ということです。まさに冒頭の「ヤンキー経済」ですね。

このように、ヤンキーはそう簡単には絶滅しないでしょう。それは、社会には彼らが必要だからです。だから邪険にせず、私たちはヤンキーと仲良くしていかなければなりません。その方法はとても簡単です。ただ愛すればいいのです。そして、優しく彼らにこうメッセージを送ればいいのです。

店員さんには優しくしろよ

(3)



文責：田井勝